

## 前置詞 “out” 再考 (1)

浅川 照夫

### 1. はじめに

アメリカ英語に特徴的なものとされる out の前置詞用法がある (John went out the back door; Mary looked out the window)。外見的には、標準的な用法である [out of NP] から of を省略しただけの単純な表現のように見えるけれども、実は、極めて限られた範囲内でしか用いられていない。本稿では、この前置詞 out の特殊な制約について一つの説明を試みる。

初めに、out の取りうる補部にはどのようなタイプがあるのか概観し、その全体像の中で前置詞句 [out NP] を位置づけておきたい。伝統的に out は副詞として分類されている。前置詞句を補部を取る場合の意味の上から分類すると、次の4つになる。<sup>(1)</sup>

[A] 起点 Source: (a) 起点の内部の外にいる (He was out of the room)。 (b) 起点の内部から外に出る (He went out of the room)。

[B] 場所 Location: (a)ある場所の外的位置にいる (He was out in the yard)。

[C] 着点 Goal: (a)ある場所から外的位置に移動する (He went out into the river)。

[D] 開口部 Opening: (a)出入り口の外にいる (He was out of the door) (b)出入り口を通過して外に出る (He went out of the door)。

前置詞句 [out NP] は、しかし、上の全てで使える訳ではなく、[D] 開口部の場合に限られている。

[A] Source: (a) \*He was out the room, (b) \*He went out the room. // [B] Location: (a) \*He was out the yard. // [C] Goal: (a) \*He went out the river. // [D] Opening: (a) He was out the door, (b) He went out the door.

前置詞 out のこのような事実は古くから指摘されてきた。西川 (1949) は自ら集めた実例を整理して、この構文は “out the window” グループと “out the door” グループの二つに大別できるとしている。前者のグループには、I got up and looked out the window のように自動詞と共に用いられている例、I shot it like a marble, out the window and across the road のように他動詞と共に用いられている例が挙げられている。後者のグループは “go out the door” が基本形であるとして、The crowd, running, went out the gate with him のように動詞に go, walk, get, leap, run, come を用いた例、door の代わりに gate, the back way 等を用いた例が多数挙げられている。Just then Handsome stuck his head out the kitchen door のように他動詞と共に現れた例もある。

西川は以上の資料を基に、「かんたんに結論を言えば、アメリカ英語で前置詞 *out* が用いられるのは、“look out the window”, “go out the door” およびそれに類似した場合だけにかぎられるといふことになる」と述べ、更に続けて、「それ以外では、“out of sight” や “out of place” のやうなフレーズの場合はもちろんのこと、“I went out of the building.” (Hemingway, Sun, p.99) や、“I took a note out of my pocket.”といふやうな場合にも、“out” をもつて “out of” の代用をさせることはないやうである」(ibid, p.67)と推論を加えている。

西川の推論が正しいことは、その後の文法書や辞書における、この制限の明示的な取り扱いを見ても分かる。例えば、Quirk et al. (1985: 9.18) では、前置詞句 [out NP] は主にアメリカ用法であるとし、さらに名詞句は an opening or aperture を指し示す必要があると断っている。

- (1) She looked out the window. <AmE and informal BrE> // She looked out of the window. <AmE or BrE>  
 // The children gathered some bluebells before they went out of (\*out) the wood and returned home.

Swan(1995:399) も She turned and went out the back door (AmE) の例を挙げて、目的語は the opening through which somebody/something passes を指すと述べている。Talmy (2000:194) も同じく、目的語は passage through an opening in the wall of an enclosure を指すとし、I ran out the back door/\*out of the back door の例を出している(文法性は Talmy の判断による)。Bolinger (1971: 34) も Talmy と似たような文法性の判断を下して、He walked out (?out of) the door; He walked out of (\*out) the house の例を挙げています。

これまで指摘されてきた前置詞句 [out NP] の特殊な制限は、「前置詞句 [out NP]において、NP は『出入口、開口部』を表わすものでなければならない」とまとめることができる。しかし、前置詞句 [out NP] のデータを眺めてみると、この制限からはみ出してしまふ事実がある。代表的な英語辞典から次の例をみてみよう。

- (2) Webster 3<sup>rd</sup>: a. <peering out his window at the river>, b. <threw his street clothes and luggage out a window onto the platform>, c. <put the cat out the door>, d. <drove through the streets of town and out the dark, wooded road to his house>, e. <lives out Elm Street>

- (3) AHD: a. <He fell out the window.>, b. <Out this door is the garage>, c. <The house has a garden out back.>

(2d) と (2e) の road, street のやうに出入口または開口部を表わさない名詞でも、前置詞 *out* の目的語になれるやうである。次のやうな例も観察されている。

Before he could reach her, she turned and ran out the hall and out into the yard. (Caldwell, Trouble, 鳥居 1954) // The Italian went out the wide corridor to the front door. (Latimer, Lady, 尾上 1957) // The wagon crawled out the entrance road. (Steinbeck, The Chrysanthemum, ibid)

ここに出ている名詞が「出入口、開口部」の名詞と共通点があるのかどうか分からないが、いずれにせよ、前置詞 *out* の目的語にどこまでの範囲の名詞がなぜ許されるのかを、明確に記述する必要がある。

また、(3c)の *back* は名詞なのか副詞なのか判然としないが、この種の adverbial NP が生じることはよ

くあることである。

Get out here, you guys need to hear this, too. (NYT, Mar. 24, 2000) // I can see this light shining from the side, so I squeeze through a couple of trolleys to see if I can get out that way. (BNC) // Stung, she stopped, poked a foot out front and hitched her free hand onto her hip. (NYT, Dec.28, 1999)

このような例を前置詞句 [out NP] とは無関係な事例として無視することはできないだろう。何らかの関係があるはずであり、out の意味ネットワーク全体の中で相応の位置づけをする必要がある。

前置詞句 [out NP] の興味ある問題は、「出入り口、開口部」のような極めて特殊な制限が、何故 out of には無関係で out にのみ関与しているのか、ということである。この問いに説明を与えようとする、仮説の上に更に仮説を積み上げたような論法が避けがたいと思われるが、本稿ではなるべく論拠の薄い仮説に依拠した抽象的な議論はせずに、英語の事実観察をもとに、前置詞 out が以上のような特殊な制限に阻まれている理由を明らかにしたい。

## 2. 前置詞省略

前置詞句 [out NP] の説明として真っ先に思い浮かぶのが、前置詞句 [out of NP] から of を省略する規則であろう。しかし、「ドアや窓から外へ」と言う場合に、副詞 out は of, at, by, through の4つの前置詞を取りうるので、前置詞省略の可能性としては4つの場合すべてを考慮しなければならない。

- (1) John went out of the door.
- (2) Downstairs she heard him making the fire, pumping water, going out at the back door. (D.H. Laurence, Lady Chatterley's Lover)
- (3) Alan went out by the front door, hurrying towards the white gate. (LOB)
- (4) Pryderi ran out through the palace doors. (DGC, E. Walton, 1972)

本稿では of と through について論じ、at と by は次稿で論じることにする。

前置詞 of 省略案の代表に小西 (1955, 1981) があり、その根拠として次の5つの要因が挙げられている。(i) アメリカ英語では [out P NP] の P 省略傾向が強いこと (ex. out in the West > out West, out in the front > out the front)、(ii) アメリカ英語では、前置詞 of は省略されやすいこと (ex. a couple of years > a couple years, atop of the waves > atop waves, a quarter of an hour > a quarter-hour)、(iii) [out of NP] では out に意味の中心があり、of は「添え物の価値」しかないこと、(iv) out of the door/window の使用頻度が高いので、linguistic economy や laziness により添え物の of は省略されやすいこと、(v) 文章のリズムが関与すること (小西 1955:73-76)。

要するに、小西は前置詞句 [out NP] は文法内規則の問題ではなく、文法外の言語運用に関する諸要因が相互に絡み合って生成された句であると主張している。しかし、これら文法外要因をいくつ重ねても、目的語が「出入り口、開口部」の名詞に限られているという事実はどうしても捉えることができない。上記の条件から、go out the door と \*go out the car を区別するには、せいぜい door と car の使用頻度の

差を考慮するしかないのだが、この差を示す統計的に有意義な数値が得られるという保証はない。

(i) については後の稿で論じるが、前置詞 *out* のもう 1 つの問題として説明されるべき重要な事実である。したがって、*of* 省略の根拠とするのは本末転倒である。(ii) で述べられていることは非常に限定的な語彙と共に生じる *of* にだけ当てはまるので、そのまま一般化して、不用意に前置詞 *out* にまで広げることにはできない (ex. *a pair of socks* > \**a pair socks*, *a bunch of flowers* > \**a bunch flowers*, *a number of people* > \**a number people*, *a couple of my friends* > \**a couple my friends*)。 (v) は [out of NP] か [out NP] かの選択条件の一つとしてなら考慮してよいが、*of* 省略の説明とすることはできない。

(iii) と (iv) は、対象となる語彙が省略できるのは、その語彙が意味的に空もしくは機能的に重要な働きをしていない場合であるということを主張している。しかし、前置詞句 [out of NP] における *of* の意味内容が希薄であるというのは間違いである。Langacker (1999: 76) は前置詞 *of* を “an inherent-and-restricted-subpart relationship between its trajector and landmark” をプロファイルするものと定義している。つまり、*the bottom of the jar* を例にとると、*of* はジャーと底とが切り離すことのできない全体と一部の内在的関係にあるという意味を担っている。Tyler and Evans (2003) はこの内在的関係を *out of* のプロトタイプ意味に応用し、*out of* は *out* から非内包、*of* から内在的関係の意味を引き継ぐとして、「トラジェクターがそれと内在的関係にあるランドマークに内包されていない」という意味のスキーマを提案している。[out of NP] の NP が起点として機能するのはこのためである。以上のように [out of NP] の *of* は決して「添え物の価値」しかないのではなく、重要な意味機能がある。したがって、意味的に空な要素が省略可能であるという原則が正しいとしても、それを無条件で [out of NP] に適用することはできない。(2)

確かに、音声面で *out of* の *of* が *outa* またはほとんど聞こえないくらいにまで弱化されるのは、*of* が無強勢、単音節である他に、内在的関係という意味が他の意味に比べて概念的に目立っていないせいかもしれない (Haiman 1983, Langacker 1999)。しかし、この簡素化傾向と文法的な省略とは明確に区別されなければならない。*of* は大体どこに生起しても弱化して発音されやすいが (*one o' them*, *a cup o' coffee*)、いざ完全に消滅させるという段になると、既にみたように、省略は極めて限定的な一部の語彙に限られてくる。[out NP] の場合はさらに特殊な制限が付随してくるので、単純に *of* 省略を認めることはできない。

次に示すように、前置詞 *out* の代わりに *in* を用いて、「～から入る」という反対の意味になる前置詞句 [in NP] の存在も、*of* 省略にとっては非常に都合の悪い例である。

- (5) He used to come in the window off the fire escape. (LA Times, Aug. 14, 2003) // William waited until some looked in the window. (AP, Mar. 12, 1999)

この *in* は、*She came in/into the house* のようにアメリカ英語の口語用法で *into* の代わりに用いられる *in* と混同されやすいが、*into* で代用させることができない特別な *in* であることに注意。\*He looked into the window; \*He walked into the back door は「～を通して見る、入る」の意味にはならない。面白いことに、

この [in NP] にも [out NP] と同じく「出入口、開口部」の制限が適用される (\*He come in the roof; \*He looked in the fence)。ところが、in の場合には前置詞 of が生起する余地がない (\*He came in of the window)。当然、[in NP] にも [out NP] と同じ原則が働いているはずであり、両者を同時に説明できる提案でなければ妥当とは言えない。

前置詞 through の省略は、of よりも可能性としては高いかもしれない。なぜならば、He went out (through) the door; He looked out (through) the window; A car came out (through) the tunnel のように、前置詞 through が通り抜け可能な名詞句を目的語に取るので、同じ意味を伝えることができるからである。しかし、He went out \*(through) the bathroom; She stared out \*(through) the frosted glass; We gazed out \*(through) the mist など [out NP] では許されない名詞句を取れること、[in NP] の場合でも She came in through the door/kitchen; She came in the door/\*kitchen のように名詞句の範囲にずれがあることなどの問題があるので、ここでも省略現象としては認めがたい。

### 3. 経路を表す前置詞

[out NP] が [out of] や [out through] と密接に関係しているという言語直感は誤りではない。しかし、前置詞省略のアプローチの問題は、この直感に頼りすぎるあまり、of の周辺に起こる言語事実の観察に終始して、表層的な規則から逃れられなかったところにある。このような狭い見方では「出入口、開口部」という特殊な制約を捉えられないことが明らかになったので、この問題に対するアプローチそのものを転換する必要がある。

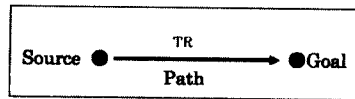
「出入口、開口部」の制限は確かに特殊であるけれども、out が既存の英語の前置詞群の意味から全くかけ離れて、単独で、このように特殊な制限を持つようになったとは考えられない。どのような言語事実にもせよ、言語の文法体系全体を掌握する原理群に従っているものであり、そうでなければ、言語の基本的機能であるコミュニケーションが成立し得ず、言語体系は混沌に陥ってしまう。

したがって、out の問題を扱うなら、まず我々が調査すべきことは、英語の前置詞群を意味タイプ別に分け、それぞれがどのような意味的特徴を持っているかを考察し、英語の前置詞群の基本的な用法を把握しておくことである。仮にある語彙が新しく前置詞として用いられるようになれば、その語彙は英語文法の原理に従わなければならない以上、英語の前置詞を支配する統語的、意味的原理から大きく逸脱することはできない。

前置詞 out は英語の一用法として確立しているのであるから、既存の前置詞群のいずれかの類に属しているか、またはそれと非常に近い意味を持っていることが予測される。このような前置詞の類が見つければ、out が前置詞として用いられる際に、その前置詞類の意味構造を引き継ぐことになる。そうすれば、その前置詞群の用法から、out の「出入口、開口部」の制限が自動的に導き出されてくる可能性が考えられる。本節では、このような角度から、一見極めて特殊と思われた制限が、実は英語の文法体系に厳密に則っていることを論じる。

### 3.1. 意味的特徴

英語の前置詞は「静的な位置関係」と「動的な位置関係」に分類することができる。前者は in, on, above など物体と物体との内と外、接触、近接、上下関係などを表す。本節で扱うのは後者で、物体の移動に関わる概念化と直接関連する。図1は Lakoff (1987)、Johnson (1987) で論じられている「起点・経路・着点のスキーマ」で、移動する物体 *trajector* が起点 *source* から出発し、ある経路 *path* を辿って着点 *goal* に至る、連続した方向運動を表す。



Source-Path-Goal Schema

図 1

前置詞は図1のそれぞれのポイントに関わって、「起点の前置詞」(from, off, out of, away)、「着点の前置詞」(to, into, onto)、および「経路の前置詞」(up, down, through, along, around, across)の3種類に分類できる。[out NP]の意味を考慮すれば、この中でも、経路の前置詞に着目すればよいだろう。

初めに、経路の前置詞全般を考察するにあたって必要になる意味要素を考えてみよう。

(6) John ran across/along/around/through the wheatfield.

図1のスキーマの各ポイントのうち、起点の前置詞が起点のみ、着点の前置詞が着点のみに関与するのに対し、経路の前置詞は起点、経路、着点の3ポイントすべてに関与している。across を例にとると、起点は麦畑周辺のある地点、着点はその地点から麦畑を横切って最も遠いところにある麦畑周辺の地点、経路はこの二つの地点を結ぶ線である。

起点・着点の前置詞では、ランドマークとなる名詞句はゼロ次元の点としてイメージ化されるが、経路の前置詞では2次元の平面 (along, around, across) または3次元の立体 (through) のどちらかでイメージ化される (Kaufmann 1993, Lee 1998)。同じグループの語彙であっても、前置詞の違いによって認知のされ方が異なる。(6)の the wheatfield で言えば、along の場合はある平面図形の周囲の線、around では円形の平面、across の場合は横長の平面、through では筒形の立体といった具合である。3次元的なイメージ・スキーマについては Dewcl (1994) 参照。

トラジェクターである John が辿る経路は、起点・着点の前置詞では問題にされないが、経路の前置詞では必ずランドマークの内部に形成されなければならない。例えば、across, through では麦畑の内部を横断していく。along, around では麦畑の周辺または内部どちらにも解釈が可能である。しかし、周辺といっても、麦畑に近接して、その形状に沿うものでなければいけないので、広い意味で内部と考えてよい。

経路が形成される場合、進む方向が暗黙のうちに了解されている。Tyler and Evans (2003: 219) による

と、through は “a spatial relation in which a bounded LM is transected by virtue of an entrance point and an exit point” を表わすとされている。つまり、トラジェクターはランドマークを通路として入り口から出口へ向かって運動するのである。(6) のその他の前置詞でも出発点からスタートしてある地点へ向かう運動の方向性が含意されている (Schibsbye 1970 参照)。

さらに、経路は認知されたランドマークの形状に左右される。2次元平面であればその表面上を、3次元空間であればその内側を、ランドマークの形状にそって経路を形作っていくことになる。例えば、along では2次元平面として捉えた麦畑が丸形ならばカーブを描いて、方形なら真っ直ぐに走ることになる。

以上のように、経路を表す前置詞はトラジェクターが辿る経路に関して、その形成場所、運動の方向性、ランドマーク形状への依存性、ランドマークの通路機能といった意味特徴がある。まとめると次のようになる。

(7) Properties of Path-Prepositional Phrase [P NP]:

[A] The trajectory Path is contained within the Landmark NP.

[B] The preposition P expresses a directed line of motion with respect to the Landmark.

[C] The way the trajectory Path goes depends on geometric description of the Landmark.

[D] The Landmark functions as Passage.

以下の小節では、前置詞 up, down を取り上げ、上の意味特徴がどのように顕現されているか具体的に検証する。

### 3.2. UP, DOWN

前置詞 up, down は運動の方向が逆であることを除けば、全く同じ統語的、意味的特徴を持っているので、同列に扱うことにする。

前置詞 up, down が取る目的語には、その形状に特徴がある。以下、up の意味と用法をまとめてみる。

- (8) (a) *in a higher position of something*: He was up the ladder, cleaning the windows. (MacmillanED), (b) *toward a higher place or far end of something*: Go up the stairs and turn right. (LongmanAAD), (c) *in a place along something in a direction away from someone*: We live just up the road, past the post office. (OALD)

前置詞句全体の意味は共起する動詞によって場所や方向の意味が変わるが、目的語には縦長の形状で、上下の位置関係がはっきりとイメージ化できる名詞 (mountain, river, hill, path, tree, valley, etc) が生起する。以下の例では細長い立体である。

- (9) In the winter they gathered the wood for the fireplace --- solid oak logs that sent sparks whirling up the chimney on a bitter winter's night. (DGC, 1951) //...there came up the chimney the sound of climbing hands and feet. (DGC) //Food and stomach acid come up their esophagus and out of their

mouth. (Web) //For catarrh and all head diseases, snuff very little up the nose. (NYT, May 8, 1998)  
//But no, you just breathe out your germs, then breathe them in again and then they go up your nose,  
each time re-infecting you. (The Japan Times online, Sat. Dec 9, 2006) //The three of them had  
come back down the tunnel to the entrance. (BNC)

文脈の中で形状が細長いもの、もしくは小高いものとして特別に指定されていない限り、\*They lived up the forest; \*John walked up the garden のような文は認められない。

(7) の意味特徴との関連で眺めてみよう。Go up the stairs! を例に取ると、the stairs が縦長の細長い2次元平面でイメージ化され(C)、その平面上を(A)、下方から上方へと(B)、トラジェクターである you が昇って行く。当然、階段は通路の役割を果たす(D)。このように (7) A-D のすべての要件に当てはまるが、もう少し詳細に検討しておこう。

まず、[A] の「内部に含まれる (contained within)」という条件であるが、これはやや緩やかに解釈する必要がある。次の文に見られるように、トラジェクターの経路はランドマークの内部にできるのが原則であるが、

(10) When people sit in an ale house or drifting down the river in a boat start singing I am silent. (S. Maugham, The Summing Up) //And so Edwards would go up and down the hallways to check in on his assistants. (NYT, Jan.7, 2003)

位置関係を文字通りに解釈すれば、トラジェクターの経路はランドマークの内部になくてもよい場合がある。例えば、John rolled the ball up/down the stairs ではボールが階段に接触しながら転がっていくが、John threw the ball up/down the stairs では階段に触れないで空中を飛んでいく。しかし、このような場合でも、(1)の along, around のところで述べたように、前置詞句 [up/down NP] の意味の範囲内にあると考えて、「内部に含まれる」として構わない。

Herskovits (1986)は、例えば、the bird in the field が、鳥が野原に降り立っている場合にも野原のやや上空を飛んでいる場合にも表現可能であるという事実から、前置詞の空間的意味がやや広めに解釈される事実を Tolerance Shift と呼んでいる。前置詞 in の厳密な意味からすれば、後者の解釈は鳥が野原の中にいるとは言えまいが、野原の領域内のそれほど高くない上空を飛んでいる場合にだけ言える表現なので、前置詞句 [in the field] の許容範囲に入る。There is a bridge across the river; The plane flew across the Atlantic の場合も同じで、前置詞 across の厳密な意味では、トラジェクターの横断経路はランドマークの表面に接していなければならないが、たとえ接していなくても、トラジェクターとランドマークが近接していれば、across の意味の範囲内にあると認知される。

次に [C]。これは経路の解釈がランドマークの形状に依存することを述べている。では、前置詞 up がどのような形状の目的語を取ったときに、どのように経路が解釈されるのだろうか。以下、具体例を挙げて論じよう。

Jackendoff (1985: 284-5) が、前置詞 up の意味に関して僅かに触れている箇所がある。Jackendoff によ



ると、前置詞句 [up NP] は ‘upward on NP’ の意味、‘on’ は “contact with the support by the outer surface of an object” の意味である。つまり、[up NP] は「物体の外部表面を支えとし、それに接触しながら上の方へ」と解釈される。したがって、支えとして機能できる the tree とその機能を持たない the clouds の差が、The cat went up the tree; \*The airplane went up the clouds の差となって現れるという。

外部表面との接触・支えの条件は、動詞 climb の他動詞用法にも現れる (Jackendoff 1985: 284)。他動詞 climb が概念構成素 [VIA ON Thing] を内在的に持っているのので、Bill climbed the mountain/volcano/cistern において、Bill の移動経路は山、火山、貯水タンクの外側表面に接触していなければならず、山の内部に作られたトンネルを利用したり、噴火口の内壁やタンクの内側をよじ登っていくという解釈は成り立たないという。

Jackendoff の指摘は興味深いものであるが、なぜ前置詞 up や他動詞 climb が ‘in’ ではなく ‘on’ を内在化させているのかという素朴な疑問が生じる。ここには話者の視点と物の形状認識に関わる問題が絡んでいると思われる。The cat climbed the tree を例にとり、文理解の問題を考えてみよう。我々が現実世界で繰り返し経験する事象から生じる基本的な認知構造は image schema で表象される。モノとしての the cat, the tree にそれぞれ特有の1つのゲシュタルト gestalt が付与されるのと同じように、行為としての climb も、「単なる部分の集合体以上のものである構造化された全体としてのゲシュタルト」(Lakoff 1987: 272) として認知され、概念化される。行為の image schema にはトラジェクター、ランドマークとしてのモノが含まれている。モノは通常そのプロトタイプがはっきりと他から識別されるゲシュタルトを持つものであるが、行為の image schema に現れるモノは、特定の物質に限定されない限り一般化され、抽象的な記号で表示される。例えば、我々の視覚的に体験するところの行為 climb の image schema では、猫が樹に登るのも、蟻がガラス板に登るのも同じスキーマに基づいて認知処理されるので、猫や蟻はゼロ次元の点として、樹木やガラス板は細長い2次元平面（または垂直の1次元線）としてイメージ化される (cf. Ungerer and Schmid 1996: Chapter 4)。2次元平面として認識すれば、当然、その内部は解釈の対象となり得ず、外部表面とそれへの接触のみが文の理解に関わる。つまり、我々が視覚体験に基づいて他動詞 climb の行為に関わる目的語を2次元平面で捉えるために、Jackendoff の言う ‘on’ の解釈だけが生じるのである。

このように目的語を何次元物体として認識するかという点から Bill climbed up the cistern を見てみると、解釈に幅が出てくる。実は、Jackendoff が指摘した解釈以外の解釈も可能である。例えば、貯水タンクの上で遊んでいた Bill が誤ってタンクの中に落ちてしまい、脱出するために懸命に這い登っていきこうとしており、一方、外からは救助隊による救出活動が行われている、こんな状況を想定した場合、二つの解釈が可能である。一つは、タンクの中にいる Bill の立場からの発話として、もう一つは救助隊員の立場からの発話としてである。前者の場合、貯水タンク内部にいる Bill の視点から、タンクの2次元平面イメージ化が行われている。後者の場合は複雑だが、まず救助隊員の視点からタンクの3次元立体イメージ化が行われ、次にその立体内部で Bill の視点による2次元平面イメージ化が行われ、救助隊員が Bill

の視点から発話していると考えることができる。いずれにしても、誰の視点から目的語を何次元で認識しているかを考慮することによって、Bill がタンクの内部壁面を登ってくるという解釈が可能である。重要なことは、この解釈が Bill climbed the cistern では生じない、つまり、前置詞 up が解釈のカギを握っているということである。

Jackendoff は「物体表面との接触・支え」を前置詞 up 用法の重要な要素と考えているが、これが形状認識とどのように関わるか、以下の二つの文を比較してみよう。

(11) Skiers walked up the slope.

(12) Sparks whirled up the chimney. //The bird flew up the chimney. //There came up the chimney the sound of climbing hands and feet.

確かに (11) ではスキーヤーの足が支えとなる坂道に接触している。しかし、(12) では火花、鳥、音が煙突の壁面に接触しているようがいまいが、十分に意味は成立する。実際、3次元立体を上昇する運動は、壁面接触の条件がない前置詞 through を伴っても表わすことができる。

(13) From it, the look-out men would send a smoke signal up through the chimney whenever a whale was offshore. (BNC) //People will vomit through their mouth, but when it comes up through the esophagus in a rush it can be pushed up through the nose. (Web)

どこに違いがあるかという点、up の目的語の形状である。以下の図に示すように、(11) の the slope は縦長の2次元平面としてイメージ化され、the chimney は3次元立体としてイメージ化されている。前置詞 up の3次元目的語は、立体の中でも特に内部が空洞の筒状の円筒形でイメージ化されるものでなければならない。これは、上に挙げた (4)の諸例を見ても了解されることで、さらに、このイメージが [D]の通路機能とも関連している。

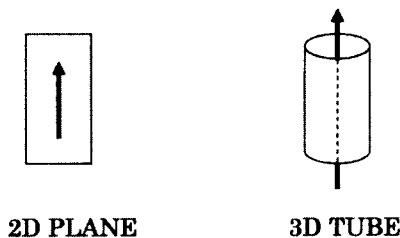


図 2

物体表面との接触は、目的語がどの次元でイメージ化されるかに関与する。前置詞句 [up NP] では、NP が2次元平面の場合、トラジェクターはNPの表面に接触しながら上方へ移動しなければならない。それに対して、NPが3次元筒状の場合、トラジェクターはNPの内部空間を上方へ移動するだけでなく、内部壁面への接触の有無は問われない。The cat went up the tree の the tree は内部に空洞がないので、前置詞 up の3次元立体とはなり得ず、2次元平面として外部表面のみが解釈の対象となる。\*the

airplane went up the clouds の the clouds は2次元平面としても3次元立体としてもイメージ化可能である。Jackendoff (1985) によると、この文が正しくないのは雲に物を支える働きがないからだとされるが、これは雲を2次元平面でイメージ化した場合である。飛行機がその姿を隠さずに雲の表面を上昇していく光景を連想するが、雲が飛行機を支えているという認識はできないので、これは現実的にありえない。しかし、3次元立体のイメージならば、飛行機が雲を突き抜けて上昇していくという解釈が可能で、支えの有る無しに関係なく、ごく当たり前の現実として起っていることである(ちなみに、The airplane went up through the clouds は正しい)。それでも up the clouds が許されないのは、我々の経験上、雲の塊を空洞の円筒形としてイメージ化することはできず、したがって、通路としての機能を持ち得ないからである。\*John walked down the wood も同じで、the wood には地面という支えがあるが、円筒形のイメージ化ができないので、前置詞 down の目的語には不向きなのである。The ladybird went up the chimney は多義で、てんとう虫が煙突の外側表面を這い登る様子と煙突の内部を飛んでいく様子の二つの解釈が可能である。

前置詞 up の経路形成が目的語の形状認識と深く関わることを指摘した。特に、縦長平面、筒状円筒形と表面接触との関係は以下のようにまとめることができる。

[C-1] When the Landmark is schematized as a 2D planar surface, the trajectory Path requires contact with and/or support by the outer surface of the Landmark.

[C-2] When the Landmark is schematized as a 3D cylinder, the trajectory Path goes via the inner space of the Landmark.

最後に、[B] の上向き指向性と [D] の通路機能とが相俟って生まれる選択制限を指摘しておく。次の文を比較してみよう。

(14) An officer was driven up the skylight, and found himself on deck unhurt.

(15) ?\*Mary stared up the window of her office.

開口部という点では skylight も window も同じであるので、through を使えばどちらも up と共起できる。

(16) I dragged the steps to the middle of the room, climbed them, swung myself up through the skylight by which the monster had entered. (BNC) // Mary stared up through the window of her office.

しかし、前置詞 up では skylight だけが自然に共起できる。前置詞 up は上方指向性なので、意味解釈において目的語の形状と直に関連しているのであれば、通路としての目的語も上方指向的な解釈を認めるものでなければ意味の整合性が取れない。天窗は下から上を見るものなので、上向き視線という意味特徴を持つが、事務所の窓は通常、水平向き視線である。この目的語の機能の違いが(14)と(15)の容認可能性の違いの原因になっている。

### 3.3 ま と め

下の表は上の議論を基に、経路を表す前置詞のそれぞれの特徴をまとめたものである。

		UP	DOWN	THROUGH	ALONG	ACROSS	AROUND
[A] LM に経路形成		○	○	○	○	○	○
[B] 方向づけ		上方	下方	S-to-G	S-to-G	S-to-G	S-to-G
[C] 目的語形状認識	2D	縦長	縦長		○	横長	丸形
	3D	縦長筒状	縦長筒状	○			
[D] LM の通路機能		○	○	○	○	○	○

S-to-G は起点から着点への方向運動を表わすが、特定の方向指定に関してはニュートラルであることを示す。例えば、John swam along the river を例に取ると、along によって川のある地点からある地点までの距離を泳いで移動したことは分かるが、上流から下流へ泳いだのか、下流から上流へ泳いだのかについては曖昧である。つまり、前置詞それ自身が方向付けられた運動を示しても、具体的に特定の方向までは指定していないのである。この点、前置詞 up, down は特定の方向を示すので、他の前置詞とは異なる。上の文を John swam up/down along the river. とすれば、泳いで行った方向が明確になる。

前置詞 through の3次元目的語が ○ とだけ指定されているのは、それ以上の形状指定は必要ないことを示す。through の3D 目的語は、3次元立体で通り抜け可能であれば何でも良い (Hilferty 1999, Hawkins 1988)。制限がゆるいので、up, down の目的語に生じない名詞でも、through とならば共起できる (John walked down through the wood; I saw the sun climbing up through the clouds)。

### 4. 前置詞としての OUT

副詞 out または前置詞 out (of) として現れる out の基本的意味を考えてみよう。Tyler and Evans (2003: 200) は out は第一義的に “a spatial relation in which the TR is exterior to a bounded LM” を意味し、我々の日常経験においては “it is evident that many TRs that are not contained by LMs at one time were” と述べている。つまり、out はトラジェクターがランドマーク内部にないというだけでなく、もともとランドマークの内部空間内にあったトラジェクターが、ランドマークの外部空間に移っているという位置関係を表している。ランドマーク空間内にあったという事実は、副詞 out では顕在化されないが、前置詞 out (of) では顕在化される (He took the lighter out; He took the lighter out of his pocket)。したがって、起点としてのランドマーク、着点としての外部位置、ランドマーク内部と外部位置を結ぶ経路を含む点で、out は経路の前置詞と同じ意味グループに属していると言える。ただし、経路形成については、移動を含む文と含まない文とは異なる。ランドマークからの移動を含む John went out of the house では、着点がランドマーク外部のどの位置かは不明であるにしても、起点から着点までの経路形成は明白である。一方、静的な Mary is out では、トラジェクターが本来居るべきランドマーク内部にいないで外にいるということを述べているので、内部から外部への移動が暗黙に了解されている。

経路の方向性 orientation の視点から out を見ると、トラジェクターはランドマークの空間 SPACE-1 から着点のある別の空間 SPACE-2 へと移っていく。この空間から空間への移動は単一方向の移動で、SPACE-2 から SPACE-1 への逆方向は “in” になる。

‘outward’: [SPACE-1] → [SPACE-2]

経路の前置詞の方向移動と比較してみる。物体全体の SPACE の下部空間を SubSPACE-d、上部空間を SubSPACE-u とすると、前置詞 up は SubSPACE-d から SubSPACE-u への単一方向移動、前置詞 down は SubSPACE-u から SubSPACE-d への単一方向移動である。逆はありえない。

‘upward’: [[SubSPACE-d] → [SubSPACE-u]]

‘downward’: [[SubSPACE-u] ← [SubSPACE-d]]

それに対して、他の経路の前置詞は、ある一つの地点 (SubSPACE-1) から別の地点 (SubSPACE-2) への移動を表わすが、二つの地点のどちらを移動の起点にしても前置詞の意味は成立するので、逆も可能な双方向移動になっている。例えば、John swam across the river ならば、どちらの岸からどちらの岸へかは文脈でしか決められない。

‘across, along, around, through’: [[SubSPACE-1] ←→ [SubSPACE-2]]

前節の冒頭に述べたように、out が前置詞用法を確立していく場合、その形式と意味の範囲は既存の前置詞群の制約から勝手に外れていくことはできない。意味が似ている前置詞群があれば、そのグループのメンバーとなって様々な特徴を模倣していくと考えるのが自然である。Pinker (1989), Goldberg (1995) その他多くの研究によって、一構文に現れる動詞の種類が、prototype 構文に生じる基本動詞との意味的類似性に基づいて様々な動詞へとアナログカルに拡張することは良く知られている。トラジェクターの経路形成に関与する様式、内在的意味として単一方向の移動を含むことなどから、out が前置詞 up, down に極めて意味が類似していると言ってよい。したがって、「out が前置詞として用いられる際、前置詞 up, down の用法を引き継ぐ」という仮説を立てても不自然ではないと考える。アナロジーの機能については Gentner and Marman (1997), Gentner and Medina (1998) に詳しい。拡張とか動的という時間軸を想定した文法観に反対する立場をとるならば、「前置詞 out は経路の前置詞 up, down と同じ類に属す」と定義するだけでよい。

#### 4.1 経路の前置詞としての OUT

3 節で経路の前置詞句 [up/down NP] には、[A] トラジェクターの経路はランドマークに含まれる、[B] 前置詞は移動の方向を表す、[C-1] 経路は細長い縦長のランドマークを支えとし接触しながら進む、[C-2] 経路は筒状立体のランドマークの内部空間を通過する、[D] ランドマークは通路である、という特徴があることを論じた。前置詞としての out が前置詞 up, down と同じクラスに属するならば、上の[A]から[D]の特徴を引き継ぐはずである。[C] を中心に見てみよう。

前置詞 up, down は目的語の形状によって解釈が左右されるという独特の特徴を持っている。[C-1]、

[C-2] は up, down が目的語を縦長の平面もしくは筒状の立体にイメージ化するので、それが無理な目的語は取らないことを規定する (John walked down the street/\*house; A bird flew up the chimney/\*room)。前置詞 out が [C-1] を引き継いだのが、以下の例である。ただし、「縦長」は up, down に固有のものなので、out では「細長い 2 次元平面」で引き継がれる。

- (1) walking out Ventura Avenue with the wagons with lions and tigers in them. (Saroyan, My Name is Adam, 尾上 1957) // She had taken him out Main Street to the fair ground. (Anderson, Winesburg, ibid) // I'll take out these boys out the servants' stairs and to the boat. (Hemingway, F256, Kirchner 1989)

これは Webster 3<sup>rd</sup> に載っている第 1 節 (2d) と同種のもので、「出入り口、開口部」の制限では捉えきれない例として提起しておいたものである。目的語の道路や階段が細長い 2 次元平面としてイメージ化されているので、「その上を歩いて外へ」と解釈される。この種の例は稀にしか観察されないので、out of の of が偶然落ちたものと見做されがちであるが、本稿の考え方では英語の前置詞体系の原則に則っている事実例となる。なお、この意味の out は、前置詞 along を伴って表現されることが圧倒的に多い。

- (2) Go out along the Canyon rim alone ... (G. Bush 1991, DGC) // ...meet the people who have come out along the banks of the Mississippi ... (J. Carter 1979, DGC) // If I'd tried to walk out along the trail, ... (BNC)

[C-2] の場合が、前置詞 out の「出入り口、開口部」の条件として指摘されてきたものである。前置詞 out が [C-2] をそのまま引き継いでいることは、第 3 節で例示した up, down の場合と同じく、目的語に tunnel, chimney など筒状の立体が生じることから明らかである。

- (3) Then, as Washington finished its fourth play of the third quarter, Sanders jogged out the tunnel and straight to his right cornerback spot without breaking stride. (AP, Oct.26, 1999) // It draws warm air from the room and sends it out the chimney, forcing your furnace to work harder. (NYT, Nov.23, 1999)

したがって、\*out the house/car がないのは、家や自動車を筒状の立体として概念化することが無理なためである。<sup>(3)</sup> なお、door, window は原則的には 2 次元平面上の開口部と考えられるが、場合によって筒状の 3 次元立体として概念化されることに注意されたい。特に、前置詞 through と結びつくと (He came through the door/window)、3 次元立体の内部を通過する経路を形成するようになる (Kaufmann 1993: 240-1)。つまり、図 3 に示すように、2 次元開口部から 3 次元筒状への再概念化が起こる。この再概念化

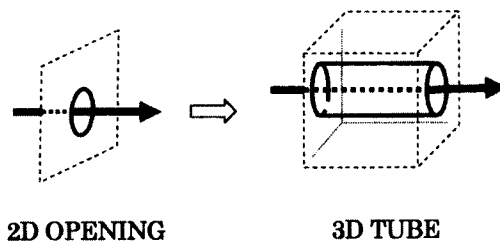


図 3

を通して、out the door, out the window が [C-2] を満たすことになる。

以上、[C] の2つの要件に照らして、前置詞 out が前置詞 up, down の用法を踏襲していることが分かった。[A] の経路がランドマークに含まれる要件、[D] のランドマークが通路の役割を担うという要件も、ここから自動的に生じる帰結である。なお、次のように副詞句 halfway, on my way と [out NP] が共起する場合がある。

- (4) Joanna was halfway out the door before a ringing telephone snapped her out of the delusion. (The Nation, March 26, 2007) // I was on my way out the door, and he grabbed me by the arm. (Clinton 1994, DGC)

これらの副詞句の解釈には、経路が存在することが必要である。上の文の解釈としては、通過する行為者の身体の横幅を経路とするか (ex. The soldiers passed the barn)、通過される物体の長さを経路とするか (ex. The ant crossed the line)、または両方を経路と想定するか (ex. The snake crossed the line)、三つの可能性がある。後の二つの可能性を否定することができないので、これらの例は前置詞句 [out NP] が3次元円筒形に再概念化されていること、および通路の役割を持つことの証拠になっている。

## 5. まとめ

前置詞句 [out NP] の厄介な問題は、NPが「出入口、開口部」の名詞に制限されるという極めて特殊な制限をいかに説明するかというところにある。本稿では、前置詞 out が英語の前置詞として機能するからには、当然、英語の前置詞の持つ統語的かつ意味的制限を遵守しなければならないと考え、outの意味に最も近い前置詞クラスが何であるかを検討することから始めた。outが経路を表す前置詞であることから、経路の前置詞全般の意味を考察し、中でも up, down の意味と用法を詳細に検討した。up, down は目的語の形状に2次元縦長平面もしくは3次元筒状円筒形という厳しい選択制限を課しており、それに応じて、移動するものの移動経路の様態にも違いがあることが分かった。この結果を前置詞 out に適用すると、2次元縦長平面 (outの場合は矩形平面) の制限からは「出入口、開口部」以外の名詞も目的語に生じることが予測され、事実観察とも合致していることが示された。また、3次元筒状円筒形の選択制限からは、まさに「出入口、開口部」の制限が自動的に導かれ、生起する名詞句も door, window に限らないことが示された。コーパス調査で out the door, out the window が圧倒的に多いのは、我々の日常生活の中で、くぐり抜ける対象としてドアや窓が際立って高い頻度で登場するからである。

言語は保守的な面を備えている。どんなに目新しい現象であっても、純然たる例外や言い誤りでない限り、その言語の文法に則って生成されている。したがって、徒に仮説を立てるより、徹底的な具体的事実観察を通してみれば、その背後に隠れている規則性が自ずと明らかになるはずである。この意味で、前置詞句 [out NP] は単純な事実であるが、文法研究にとって非常に興味あるテーマを与えてくれると言えよう。

[注]

本稿は日本英文学会第 80 回大会シンポジウム「事例研究から見た英文法の一断面」(2008 年 5 月 25 日、広島大学)において発表した内容に基づく。

- (1) 以下の例は、前置詞句 [out PP] が構成素を成し PP が out の補部であることを示す。

Out at the airport each morning, Fogg's skilled mechanic Caleb Marston would have the Waco warmed up and running in the drafty hangar. (BROWN) // and out through the window she could see down a long tunnel (BNC)

- (2) [out of NP] と [out NP] にどれほどの意味の違いがあるかを検証することは非常に難しい。参考までに、Estling (1999: 25) は “a construction with the preposition *of* is used more often when the aperture is in focus and the verb phrase is more semantically salient” と述べている。筆者の調査で、He looked out of the window は窓のすぐ前にいるか、窓から身を乗り出すような感じ、He looked out the window はやや離れた場所から窓を通して見ている感じがすると判断する母語話者がいた。

- (3) しかし、次のような例も観察されている。筆者の調査では、全ての母語話者から out of にすべきであるとの判断を得ているが、前置詞 out の用法が拡大している可能性もあるので、広範囲なコーパス調査が必要であろう。

I just came out the hospital here after a two week's illness. (Anderson, Letters, 鳥居 1954) // He turned away, walking out the barn towards the house. (Caldwell, The Caldwell Caravan, ibid) // The second day he walked out his hospital room, down the hall and back. (NYT, Feb. 18, 2000)



## REFERENCES

- BNC. British National Corpus. <http://sara.natcorp.ox.ac.uk/lookup.html>
- Bolinger, Dwight. 1971. The phrasal verbs in English. Harvard Univ. Press.
- DGC. Digital General Collection. <http://quod.lib.umich.edu/g/genpub/>
- Dewel, Robert. 1994. *Over* again: Image-schematic transformations in semantic analysis. *Cognitive Linguistics* 5, 351-380.
- Estling, Maria. 1999. Going out (of) the window? *English Today* 59, 15-3, 22-27.
- Gentner, D. and Markman, A. 1997. Structure making in analogy and similarity. *American Psychologist* 52, 45-56.
- Gentner, D. and Medina, J. 1998. Similarity and the development of rules. *Cognition* 65, 263-297.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: a construction grammar approach to argument structure*. Univ. of Chicago Press.
- Haiman, John. 1983. Iconic and economic motivation. *Lg* 59, 781-819.
- Hawkins, Bruce. 1988. The natural category MEDIUM: an alternative to selection restrictions and similar constructs. In Rudzka-Ostyn 1988, pp.231-270.
- Herskovits, Annette. 1986. *Language and spatial cognition: an interdisciplinary study of the prepositions in English*. Cambridge Univ. Press.
- Hilferty, Joseph. 1999. *Through* as a means to metaphor. In Leon de Stadler et al. (eds.) *Issues in cognitive linguistics: 1993 proceedings of the international cognitive linguistics conference*. 347-365. Mouton de Gruyter.
- Jackendoff, Ray. 1985. Multiple subcategorization and the theta-criterion: the case of “climb”. *NLLT* 3: 3, 271-295.
- Johnson, Mark. 1987. *The body in the mind: the bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Univ. of Chicago Press.
- Kaufmann, Ingrid. 1993. Semantic and conceptual aspects of the preposition *durch*. In Zelinsky-Wibbelt, Cornelia (ed.) *The Semantics of prepositions: from mental processing to natural language processing*, 221-247, Mouton de Gruyter.
- 小西友七. 1955. 前置詞(下) (『英文法シリーズ』第19巻). 研究社.
- \_\_\_\_\_. 1981. *アメリカ英語の語法*. 研究社.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Univ. of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- Lee, David. 1998. A tour through *through*. *Journal of English Language* 26-4, 333-351.
- Lindstromberg, Seth. 1998. *English prepositions explained*. John Benjamins.

西川正身. 1949. 前置詞 “out” について. 英語青年 Vol. XCV.-No.12, 2-4.

尾上政次. 1953. アメリカ語法の研究. 研究社.

\_\_\_\_\_. 1957. 現代米語文法 (『現代英文法講座』第 8 卷). 研究社.

Pinker, Steven. 1989. Learnability and cognition: the acquisition of verb-argument structure. Harvard Univ. Press.

Quirk, Randolph et al. 1985. A comprehensive grammar of the English language. Longman.

Ruzka-Ostyn, Brygida. 1988. Semantic extensions into the domain of verbal communication. In Ruzka-Ostyn, Brygida (ed.) Topics in cognitive linguistics, 507-554, John Benjamins.

Schibsbye, Kund. 1970. A modern English grammar. Second edition. Oxford Univ. Press.

Swan, Michael. 1995. Practical English usage. Second edition. Oxford Univ. Press.

鳥居次好. 1954. 出入口を表す前置詞. 英語青年 Vol. CV.-No.6, 306-307.

Tyler, Andrea and Evans, Vyvyan. 2003. The semantics of English prepositions: spatial scenes, embodied meaning and cognition. Cambridge Univ. Press.

Ungerer, Friedrich and Schmid, Hans-Jorg. 1996. An introduction to cognitive linguistics. Addison Wesley Longman Limited. 邦訳: 認知言語学入門. 池上嘉彦他訳. 大修館書店.